

社会的な見方・考え方を働かせる学びは社会認識を育む Learning to use social perspective/ way of thinking raises social recognition

山田 均・田中 雅代

Hitoshi YAMADA, Masayo TANAKA

要旨 (Abstract)

これまでから、『社会認識の育成と公民的資質の育成は、両者の根底において相互補完の関係にある。』という社会認識の育成と公民としての資質・能力の育成との間には分かちがたいものがあると考えられてきた。

今回の学習指導要領の改訂で、各教科等の見方・考え方を働かせることにより、児童の資質・能力の育成を図っていくことが明示された。小学校社会科における資質・能力の育成とは、公民としての資質・能力の基礎を育成することである。

社会認識の育成を目指して取り組んできた社会科学習と社会的な見方・考え方を働かせて取り組む社会科学習には違いがあるのであろうか。今回の学習指導要領の改訂により、社会科教育における「見方・考え方」の捉え方に混乱が生じたことは事実である。しかし、社会科がこれまでから大切にしてきた公民としての資質・能力の基礎を養うということにぶれはないということは明らかである。

本稿では、「社会的な見方・考え方を働かせ」て、社会科学習を展開していくことは、「事実認識」を基に「価値認識」を行うという「社会認識」の形成プロセスと重なるものであり、これまでから社会科教育が目指してきた公民としての資質・能力の基礎を養う教育の在り方そのものであるということ、奈良市立佐保小学校田中教諭の実践をもとに検証していくこととする。

キーワード：(社会認識) (公民としての資質・能力) (社会的な見方・考え方)

I. はじめに

小学校社会科が目指していることの一つに、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことがある。そして、このことは社会科の究極の目標である公民としての資質・能力の基礎を育成することにつながっているのである。

長谷川は、社会認識と公民的資質の育成を社会科教育の本質であると考え、『『公民的資質は社会認識に方向性を与えるものである。』すなわち、主体（個人）が、社会事象の存在や事象とのかかわりを客観的にとらえることを社会認識とするならば、その事象のあるべき方向の採択に当たっての意志決定とか、その事象と主体とのよりよいかかわり方への価値判断に当たっては、まさに、主体に培われてきたところのよき市民性（Good citizenship）、すなわち、一人の市民として、また、社会全体における公民としての資質にかかわってくる。かくして『社会認識の

育成と市民的資質の育成は、両者の根底において相互補完の関係にある。』ということをもふまえて統合的に育成されるべきものとする。』¹⁾と提唱している。こうした社会認識と市民的資質の統合的な育成の重要性については、長谷川だけでなく、佐島群巳は「環境教育」²⁾（『社会科指導用語辞典』所収 教育出版 1986）において、永井滋郎は「21世紀のビジョン」³⁾（『社会科教育の21世紀』所収 明治図書 1985）において提起している。

II. 社会認識について

社会認識は、学習者が社会科教育の成果として獲得した知識と知識を獲得するプロセスを指すものであると言える。つまり、社会認識は知識と方法の教育によって学習者のうちに形成されるものであり、事実認識と価値認識すなわち、社会的事象がもつ社会的な意味の理解に分けることができる。

事実認識とは、①社会を構成している個別の事物、事象に関しての知識、②個別の事物、事象の関連を説明する知識、③個別の事物、事象やそれらの関連から導き出した一般化できる説明の知識である。③の「個別の事物、事象やそれらの関連から導き出した一般化できる説明の知識」は概念的な知識とも言えるであろう。

一方、価値認識とは、事実認識を基に、学習者の社会に対する価値判断を含めた思考・判断である。つまり、これは、学習者が社会科の学習を通して獲得とした社会を構成している個別の事物、事象に関しての知識や個別の事物、事象の関連を説明する知識を根拠として、学習者の態度や行動を規定することにもつながっていくものである。

この価値判断を含めた思考・判断を行っていく過程において、極めて重要なことは、学習者が事物、事象の何に、あるいはどこに着目し、どのような方法で考えたのかということである。

III. 社会認識と社会的な見方・考え方

社会認識を育てることは、これまでから社会科が大切にしてきたことである。それは、長谷川が述べているように、市民的資質を育てることと社会認識を育てることは相互に補完し合い、統合的に両者を育てることにつながると考えるからである。

平成29年告示の「小学校学習指導要領」では各教科等の見方・考え方を働かせることにより、児童の資質・能力の育成を図っていくことが明示されている。その資質・能力は小学校社会科においては公民としての資質・能力の基礎である。一方「社会認識を育てる」ということは、知識と方法の教育によって学習者のうちに形成されるものである。このことを考えれば、「社会認識を育てる」学習と「社会的な見方・考え方を働かせる」学習とは、その多くの部分で重なるのではないかと考える。

「社会的な見方・考え方」については、「小学校学習指導要領解説社会編」で次のように説明されている。『『社会的な見方・考え方』は、小学校社会科、中学校社会科において、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の『視点や方法（考え方）』であると考えられる。そして、『社会的な見方・考え方を働かせ』るとは、そうした『視点や方法（考え方）』を用いて課題を追究したり解決したりする学び方を表すとともに、これを用いることにより児童生徒の『社会的な見方・考え方』が鍛えられていくことを併せて表現している。こうした『社会的な見方・考え方を働かせ』ることは、社会科、地理歴史科、公民科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成はもとより、生きて働く知識の習得に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することなどを踏まえると、資質・能力全体に関わるものであると考えられるため、柱書に位置付けられている。また、『社会的な見方・考え方』は、次ページの図のように、小学校社会科、中学校社会科の各分野の特質に応じた見方・考え方の総称であり、

小学校社会科においては、『社会的事象の見方・考え方』を働かせ、学ぶことを重視する必要がある。『社会的事象の見方・考え方』は、『位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（視点）、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（方法）』と考えられ、これらは、中学校社会科の各分野の学習に発展するものである。『社会的事象の見方・考え方を働かせ』るとは、これらの視点や方法を用いて、社会的事象について調べ、考えたり、選択・判断したりする学び方を示している。例えば、どのような場所にあるか、どのように広がっているかなどと、分布、地域、範囲（位置や空間的な広がり）などを問う視点から、また、なぜ始まったのか、どのように変わってきたのかなどと、起源、変化、継承（時期や時間の経過）などを問う視点から、あるいは、どのようなつながりがあるか、なぜこのような協力が必要かなどと、工夫、関わり、協力（事象や人々の相互関係）などを問う視点から、それぞれ問いを設定して、社会的事象について調べて、その様子や現状などを捉えることである。また、どのような違いや共通点があるかなどと、比較・分類したり総合したり、どのような役割を果たしているかなどと、地域の人々や国民の生活と関連付けたりする方法で、考えたり選択・判断したりすることなどである。したがって、教師が教材や資料を準備する際には、こうした視点や方法に基づいて、問いを意識することが大切である。なお、問いとは、調べたり考えたりする事項を示唆し学習の方向を導くものであり、単元などの学習の問題（以下、解説において『学習問題』という。）はもとより、児童の疑問や教師の発問などを幅広く含むものであると考えられる。』⁴⁾（※下線は筆者による）と、示されている。

つまり、「社会的な見方・考え方を働かせる」とは「空間的な視点」「時間的な視点」「関係的な視点」で社会的事象を捉え、「比較・分類する思考」「総合する思考」「関連付ける思考」などを組み合わせながら、児童が社会的事象の特色や意味の理解に迫っていくように学習を進めるということである。そして、この学習によって、児童は「概念的知識」を獲得するのである。

この一連の学習プロセスは、先に述べた知識と方法の教育によって形成される社会認識を形成するプロセスと重なっている。つまり、分布、地域、範囲（位置や空間的な広がり）などの空間的な視点や、起源、変化、継承（時期や時間の経過）などの時間的な視点、工夫、関わり、協力（事象や人々の相互関係）などの関係的な視点から、問いを設定して、社会的事象について調べ、その様子や現状などを捉えるという「見方」を働かせていくことは、空間認識、時間認識、社会相互の関係の認識による事実認識を行っていくことなのである。

また、比較・分類したり、総合したり、関連付けたりという「考え方」を働かせることによって、学習者が考えたり選択・判断したりすることは、学習者が、事実認識を基に社会に対する価値判断を含めた思考・判断を行ったことであり、まさに価値認識をしていることに他ならない。

以上のことから、「社会的な見方・考え方を働かせ」て、社会科学学習を展開していくことは、「事実認識」を基に「価値認識」を行うという「社会認識」の形成プロセスそのものと言っても過言ではないと考える。

そこで、奈良市立富雄北小学校※の田中教諭が取り組んだ、小学3年生「市の様子の移り変わり ～そのとき富雄が変わった!～」の実践を通して、検証を行ってみることとする。

※実践当時の勤務校、現在は奈良市立佐保小学校に勤務

IV. 田中実践について

この実践は、平成30年度に取り組まれた実践であり、令和元年10月に開催される第57回全国小学校社会科研究協議会研究大会で発表する予定のものである。以下、概要を示していく。

(1) 研究主題について

奈良県小学校教科等研究会社会科部会では、「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」を研究主題に設定している。そして、その主題設置の理由として、次のように述べている。

「よりよい社会の形成に参画するためには、社会について十分な理解、つまり意味や特色など十分な理解をしておくことや、社会の事柄を自分事として捉えること、社会的事象に関わる課題に目を向けることが求められる。これらの力は深い学びによって養われていくものであり、児童が学びを深めていく上で不可欠なものが「社会的事象の見方・考え方」である。

学習指導要領において、社会的事象の見方・考え方は「課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法」であり、「時間、空間、相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し、それらを比較、関連付けなどして考察・構想し、特色や意味、理論などの概念等に関する知識を身に付けるために必要となるもの」とされている。見方・考え方は深い学びを実現するための思考力、判断力の育成、生きて働く知識の習得に不可欠であり、また主体的に学習に取り組む態度にも作用するものであり、資質・能力全体に関わるものである。

以上のことから本年度は、中心概念を獲得し、社会の形成に参画を目指したよりよい選択・判断をするためには見方・考え方が必要であると捉え、実践に即した研究に基づいて、社会的事象の見方・考え方がいかに働き、深まっていくのか、それを働かせることで子どもの学びがどのように深まるかを追究し、見方・考え方に焦点を当てた研究を進めていきたい。⁵⁾

(2) 研究の視点

この研究主題を受け、田中実践では、土地利用や交通、人口、公共施設などの時期による違いに着目し、これらの事象の時期による違いを比較したり、事象同士を相互に関連付けたりしながら、「社会的事象の見方・考え方」がいかに働き、深まっていくのか。また、それを働かせることで子どもの学びがどのように深まっていくのかを追究していくこととしている。そして、この実践を進めるにあたって、研究の視点として以下の3点を挙げている。

- ① 時期による違いや相互の関連に着目させるとともに、時間認識の育成を図る年表の活用
 - ・年表上に人口や交通の発達の様子、公共施設、土地利用の様子を表すことで、児童は、時期による違いに着目し、それらを比較したり、相互に関連づけたりして、見方・考え方を働かせていく。
 - ・初めて歴史的な内容を学習する3年生に、時間認識の育成を図るために、視覚からも時間の長さが見える等尺年表が効果的である。
- ② 社会的事象の見方・考え方を働かせる適切な資料活用
 - ・適切な資料活用とは、資料の精選、提示のタイミングなどを意味する。学習過程に応じて、資料活用を工夫することで、児童はそれまでの見方・考え方を働かせたり、自分とは違う見方・考え方と出会ったりしながら、見方・考え方を育てていく。
- ③ ねり合い（児童相互に事実に依拠した話し合いを行う中で、見方・考え方を働かせ、中心概念に迫る学習）の重視
 - ・児童が事実や資料に基づいた考えをもち、互いに交流し合うことにより、児童は見方・考え方を働かせ、

中心概念に迫ることができる。

(3) 実践の概要

① 単元名 「市の様子の移り変わり ～そのとき富雄が変わった！～」

② 単元の目標

・奈良市の移り変わりについて、交通や公共施設、土地利用、人口の変化、生活の道具などの時期による違いに着目して、写真や地図などの資料や聞き取りなどによって調べて、年表にまとめ、人々のくらしや奈良市、富雄の様子を時期ごとに比較したり、関連づけたりして考え、説明したり、話し合ったりすることを通して、人々のくらしや奈良市、富雄の様子は時の流れとともに移り変わって来たことを理解できるようにする。
(知識・技能、思考力・判断力・表現力等)

・奈良市、富雄の様子や人々のくらしの変化について、学習問題を意欲的に追究し、自分たちが住みたいこれからの奈良市、富雄について、住民の一人として考えようとしている。

(主体的な学習態度、社会的事象に関わろうとする態度)

③ 単元について

○教材観

本単元で学習する「奈良市の様子の移り変わり」は、今回の学習指導要領の改訂において、3年生の学習内容として、新たに盛り込まれたものである。具体的には、時間軸の推移の中で市の様子の変化を考え、表現することを通して、市や人々のくらしの様子は移り変わってきたことを理解することを内容としている。

そして、この学習を進めるに当たって、社会的な見方の具体的な視点となる交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目することとそれらを比較したり、関連付けたりしながら考えるという社会的な考え方をを用いることが求められている。

また、これまでと同様、初めて歴史的な内容について学習する児童に時間認識を身に付けさせるため、年表の活用も必要である。

さらに、この学習のねらいとするところは、交通や公共施設など様々な視点を通して、市や人々のくらしの様子の移り変わりについて捉え、それらの現状を理解することに止まらない。移り変わりの様子についての理解をふまえて、市の在り方について考え、未来へと続く市の在り方を創造することへの意識を育てることが必要だと考える。それは、人々の願いである地域の開発や施設の整備・充実、それを実現させるための税金についても学習することとなっているからである。この学習は3年生の発達段階を考慮しながらも、地方自治は人々の願いを実現するために行われるものであることや、その取り組みに際しては民主的な手続きを経ていること、公共施設や道路などの公共財へ税金を使う意味などについて学習することが求められていると考える。こうした学習は社会科として求められている、すなわち、社会へ参画することの大切さ、主権者意識の醸成、ひいては公民としての資質の基礎を養うことへとつながるものであると考える。

○児童観

社会科の学習や本単元の内容に関する診断的評価の結果は次の通りである。

ア 社会科の学習は好きですか？

はい 27人 いいえ 3人

イ 社会科の学習で好きなことは何ですか？当てはまるものをすべてえらびなさい。

- | | |
|-----------------------------|-----|
| i 教科書や「わたしたちの奈良市」を読んで勉強すること | 11人 |
| ii 見学をしたり、インタビューをしたりすること | 27人 |
| iii インターネットを使って調べること | 13人 |
| iv 先生やゲストティーチャーなどの話を聞くこと | 20人 |
| v 調べたことを新聞などにまとめたり発表したりすること | 17人 |
| vi みんなで話し合うこと | 20人 |

ウ 一学期に学習した「富雄の校区探検」で印象に残っていることは何ですか。

「交番、スーパー、田畑見たこと」「ゲストティーチャーのお話を聞いたこと」「地域の人に奈良の昔のことや、生駒山のことを教えてもらったこと」「前は家が5、6軒しかなかったこと」「マンションが多いから近所の友達と遊べること」等

エ 富雄のよいところ、好きなところを教えてください。

「人が多くて安心だから富雄が好き」「家から富雄駅が近いこと」「交番があること。お花屋さん、王将、果物屋さんがあること」「お昼にご飯が食べられるところがあること」「スーパーが2～4つくらいあること」「お店や家、マンションが多いこと」「川の水がきれいなこと」「住んでいる人がにぎやかなこと」等

富雄駅周辺においては商業施設や金融機関が充実していて、バスをはじめ交通網も発達している。また、隣の学園前駅に向けて住宅地が広がっている。しかし、少子化の影響を受け、本校の児童数はこの10年間で200名以上減少している。

本学級の児童の家庭の大半は、共働きであり、大阪へ出やすいため、遠距離通勤の家庭も多い。そのため、普段から富雄駅を利用している家庭が多い。また、子どものころから富雄に住んでいるという家庭も地域に多い。このような実態からか、便利な富雄に愛着がある方が多い。

聞き取りや見学を重視した「わたしたちのまちの働く人」を学習した際には、児童たちは、学習に関心をもち、意欲的に取り組むことができた。お店の方やお客さんやお家の方へ疑問に思うことのインタビューを積極的に行い、「なぜ、このスーパーを選ぶのか？」など自分なりの問いをもつことができた。

また、わかったことをポスターに表現する活動では、班のメンバーと協力しながら、考えたことをわかりやすくまとめることができた。このように聞き取り活動や表現活動に対しての意欲は高いものがある。

その一方で、スーパー見学では事前に話し合った様々な視点でお店の様子を見学させたが、最終的には、全員、同じ視点に着目したため、分かったことをまとめる段階ではひろがりが見られなかった。さらに、みんなが利用したいお店作りの学習では、実現不可能なものを考える班があり、見学したり、聞き取ったりした事実を依拠した考えをもつことが困難な児童も存在した。しかし、「校区探検」の学習では実際に自分たちのまちを歩くことで、坂が多く歩くのが大変だったり、住宅が多かったりすることに気付くことができていた。そこで今回は児童一人一人の考えが深められるよう、家族への聞き取りを十分に行い、聞

き取ったことをもとに考えさせることを大切にして学習を進めていきたい。

○指導観

「見方・考え方を働かせる」深い学びのポイントとして、時期による違いに着目して追究できるようにする。富雄のまちの土地利用や交通網の発達について学習した後、学習の対象を奈良市へと広げて、公共施設・公共財の整備と市役所の働きとを関連付け、人々の生活の変化を見ていきたい。そうすることでこれからの市の発展について考える視点をもつことができると考える。

また、時間認識の育成を図るためにも、富雄と奈良市の様子の移り変わりや人々のくらしの移り変わりを時間の経過に沿って整理した絵年表を作成する。絵年表作成においては、昭和や平成といった元号の記載と西暦だけでは、児童の時間認識を育てることが困難であると考え、「今から何年前」「お父さんお母さんが子どもだった頃」などの記載や、時間の長さを視覚的に理解させるために等尺年表にするなどの配慮を行っていききたい。さらに年表作成の際には多角的な視点から調べ学習をさせていききたい。

単元後半では「今の富雄について好きなところや足りないところ」を事前に聞き取りをさせて、「これから富雄をどうしていきたいか」について話し合わせていきたい。様々な考えをもつ友達と意見を交わすことで、自分とは違う見方・考え方に出会い、考えを深めていくことにつなげていきたいと考える。そのためには、しらべる段階で、多角的に調べ学習を行い、社会科的な見方・考え方を働かせながら自分が住む市に対して、自分は今後どのようにかわっていけばよいかを考えさせたい。また、富雄の自治連合会の会長や奈良市役所の方から、富雄や奈良市についてどのような願いをもっていらっしゃるかを聞く学習を設定していく。立場の違う方から話を聞かせていただくことで、富雄や奈良市について多角的に考えることができるようにしたい。

なお、毎時間授業後に自分の考えを「富雄は〇〇なまちだ」「奈良市は〇〇な市だ」と記録していくことで、児童が自らの考えの変容に気づくことができるようにしていく。このことは指導者側からも児童の変容を見取ることに活用することができる。そして、その考えに対する理由を記述させることで事実に基づき、根拠を明らかにした考えを育むことにつながると考える。

④ 単元計画（全18時間）

「みつめる」段階 2時間

○富雄駅の今と昔を見てみよう。（1時間）

- ・昔の富雄駅周辺の写真と現在の富雄駅周辺の写真を提示し、3枚の写真を比べて、気付いたことや疑問に思ったことを発表し、学習問題をつくる。
- ・学習問題「わたしたちのまちの様子はどのように変わったのだろうか。」

○写真を比較しどのように変わったのか予想する。（1時間）

- ・富雄駅がまだ存在しない頃、富雄駅ができた頃、現在の3つの時期の写真を提示し、現在の写真と比べ富雄のまちの様子の違いに気付かせる。
- ・出てきた予想を「公共施設」「土地利用」「交通」「人口の増減」「昔の生活の道具」に分類して、調べ学習を進める。

（予想）

- ・家やマンションが増えた。
 - ・便利な電車を利用する人が増えて駅が大きくなった。
- ※「公共施設」においては市が整備を進めてきたことをおさえ、租税の役割についても触れる。
- のちの学習の中で、まちを良くしていくことと働くことをつなげて考えられるようにする。
- ・毎時「どうして富雄に建物（人）が増えたのか」を問いかける。
- この時点では明確な答えを持っていないことを想定しているが「電車で大阪まで行けるようになったので仕事にいけるから」などと、富雄駅に注目させる。

「しらべる」段階 10時間

- 昔の富雄のまちや富雄駅の写真、地図の資料から富雄のまちの様子の変化を読み取ろう。(3時間)
- ・「公共施設」「土地利用」「交通」「人口の増減」について、資料をもとにどのように富雄のまちは変化していったのかを学級全体で考えさせる。
- 富雄駅について調べよう。(2時間)
- 絵年表作成に向けてグループ毎に調べまとめる。(5時間)
- ・「交通」「公共施設」「土地利用」「人口の増減」「昔の生活の道具」やこれまで使用した3つの時期の地図や駅の写真を貼り、移り変わりの中で富雄のまちにどんなことが起きてきたのかを考えさせる。
- ・インターネットを使って富雄駅について調べさせ、疑問に思ったことはさらに調べさせる。
- ※富雄のまちの人口は年々増えていると予想している児童は多い。そこで、富雄駅の利用者数が年々減ってきているという事実に出会わせる。
- ※年表にする際に、元号を用いさせる。

「ふかめる」段階 3時間

- 富雄のこれまでに移り変わりについて話を聞く。(1時間)
- ・富雄地区自治連合会の会長に、富雄が変わりについて、便利や安全面など良くなった点やなくなったり失ったりしたことについてどう思っているかをお話していただく。
- ・お話から新たな視点を得て、これからの富雄についてどうなってほしいかも含め、感想を書かせる。
- これから富雄のまちをどうしていきたいか話し合う。(2時間)
- ・少人数のグループで年表を読み取り、富雄のまちの移り変わりについて気付いたことを発表させる。
- ・年表は現在で終わっているが、年表の続き、これからの富雄のまちは自分たちが創っていくことを意識させる。
- ・「私が考えるこれからの富雄」のワークシートにキャッチフレーズや絵と説明を一人一枚書かせる。
- ・年表から富雄の移り変わりについて考える。
- ・「私が考えるこれからの富雄」と題して自分が思い描くまちのイメージを発表する。
- ・絵空事にならないように既習事項を踏まえて考えさせる。その際、前時で作成した年表をヒントに未来について考えさせる。
- ・家族に、今の富雄について好きなおとろや足りないところを聞き取りをさせておく。
- ・自分と違う見方や価値観を認め合えるように話し合いをさせる。

- ・これからの富雄のまちを創るのは自分たちだという主権者意識をもたせる。

「ひろげる」段階（3時間）

○奈良市がどんな市になってほしいか考えよう。1時間

○これまで学習したことをもとにカルタを作ろう。2時間

- ・奈良市も富雄と同じように、移り変わってきているのか、副読本を用いて調べさせる。
- ・ここまでは校区である富雄について学習してきた。この場面では、奈良市の移り変わりについても学習を進める。富雄のまちについて学習してきたことを活用して、奈良市について学習できるように配慮する。
- ・副読本を中心に、富雄のまちの様子と異なる特徴をもつ奈良市の3つの地域を取り上げる。（月ヶ瀬地域、南奈良、近鉄奈良駅付近）
- ・奈良市都市課に連絡を取り、奈良市の考えや願いを聞き取っておく。
- ・導入で取ったアンケートと比較し「奈良市ってどんな市」について、自分の考えの変化に気付かせる。
- ・「奈良市が時代とともに今後どう移り変わっていくか」や「大人になったときにこんな暮らしをしたい」と自分の願いをもとに、奈良市の将来について考えさせる。
- ・学習したことを奈良市役所や地域の方、家族等に発信するため、奈良市や富雄のまちについて紹介するカルタを作らせる。

⑤ 実践の概要

「みつめる」段階

- ・富雄駅がまだ存在しない頃、できたころ、現在の3つの時期の写真を提示し、現在の写真と比べ、まちの様子の違いに気づき、「わたしたちの町の様子はどのように変わったのだろう。」という学習問題をもった。そして、写真を比べることから、富雄の町がどのように変わったのか予想した。出てきた予想を「公共施設」「土地利用」「交通」「人口の増減」に分類し、追究の見通しをもった。

「しらべる」段階

- ・「公共施設」「土地利用」「交通」「人口の増減」について調べ、調べたことを年表に表した。
- ・児童によって「昔」という概念が違うので、時間認識育てるために等尺年表（10年を1メートル）を作成した。
- ・富雄の町の人は年々増えていると予想している児童は多い。しかし、富雄駅の利用者数は年々減ってきていることが明らかになった。



「ふかめる」段階

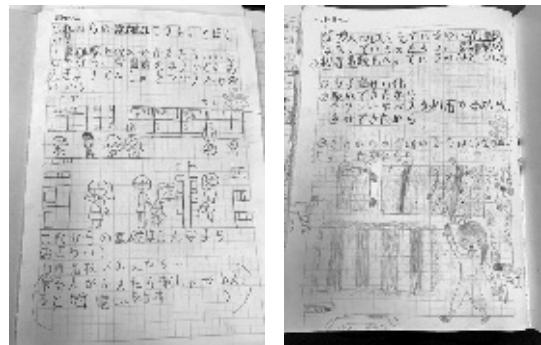
- ・連合自治会長から、これまでの富雄の町の移り変わりや、その移り変わりについての思いを聞かせてもらった。
- ・「私が考えるこれからの富雄」のワークシートに、願いを込めたキャッチフレーズや絵と説明を書いた。絵

空事にならないように既習事項を踏まえて考えさせた。そして、作成した年表を手がかりに、富雄の町の未来について考えた。この学習を通して、未来の富雄の町を創るのは自分たちだという主権者意識につなげた。



「ひろげる」段階

- ・富雄の町の学習をもとに、奈良市の移り変わりについて学習を進めた。副読本を中心に、富雄の町と異なる特徴をもつ、月ヶ瀬地域（茶作りが盛んな高原地域）、南奈良（昔からの町）、近鉄奈良駅付近（奈良市の中心街）の3つの地域を取り上げた。



- ・「奈良市が時代とともに今後どう移り変わっていくか」、「大人になったときにこんな暮らしをしたい」という自分の願いをもとに、奈良市の将来について考え、その考えを地域の方々や奈良市役所等に発信するため、奈良市や富雄のまちについて紹介するカルタを作成した。

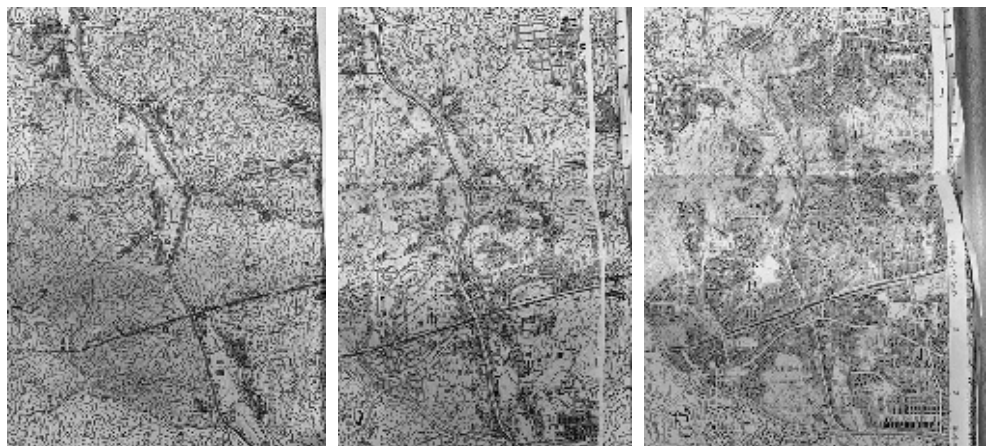
という自分の願いをもとに、奈良市の将来について考え、その考えを地域の方々や奈良市役所等に発信するため、奈良市や富雄のまちについて紹介するカルタを作成した。

⑥ 成果と課題

○単元の導入段階で取り入れた3枚の写真は、児童に「町の様子の移り変わり」に着目させることにつながった。また、児童が調べたことや授業で活用した写真や地図などの資料を年表に貼付することで、時期による違いを比較したり、異なる事象を関連付けたりすることができた。このように、資料の効果的な活用は、児童の社会的事象の見方・考え方を働かせることにつながった。

○一人一人の

児童が着目した社会的事象を調べることで、児童は自分なりの見方を育てていったように思う。そして、同じ事



富雄地区の土地利用図 左から大正、昭和、平成の地図

象に着目した児童同士で富雄の町の変化を探するときには、互いに違う見方を結び付けて考えだすグループも出てきた。児童のこれらの姿から、社会的事象を多角的に見ることや、互いの見方を交流しながら社会的な意味について考えることができたように思う。

○等尺年表の活用は、視覚的に時間を意識させることにもつながり、児童の時間認識を育てることに効果的であった。

○「これから富雄をどうしていきたいか」について考える学習では、自分とは違う見方・考え方に会い、考えを深めていくことにつなげていきたいと考えた。そこで、しらべる段階で、多様な視点から調べ学習を行い、自分が住む町に対して、自分は今後どのようにかかわっていけばよいかを考えさせていった。また、立場の違う人の話を聞かせていただき、富雄の町や奈良市について多角的に考えることができたようにした。ただ、「これからの富雄の町」の交流で、十分な時間をとることができず、自分と違う見方や考え方を認め合える話し合いを深めることができなかったことが残念であった。

V. 社会的な見方・考え方を働かせる社会科学習は社会認識を育てる

・本実践では、導入段階で富雄駅ができる前、富雄駅ができたころ、現在の富雄駅という3枚の写真を提示している。児童たちは自然と3枚の写真を比較し、自分たちがよく知っている富雄駅や駅周辺の街並みが変わってきていることを発見していた。そして、「わたしたちのまちの様子はどのように変わったのだろうか。」という学習問題を生み出していった。この学習問題に対して、児童たちの予想は駅や道路、店や施設、人、などに着目した内容に整理されていき、「公共施設」「土地利用」「交通」「人口の増減」「昔の生活の道具」の5つに着目して、調べていくことで学習問題が解決できるであろうと見通しをもって学習に取り組んでいる。このことは「社会的な見方（視点）」をもって、社会的事象を追究しようとしていることであるとともに、学習対象である社会的な事象の理解を図り、そのことに対する知識を獲得しているという姿でもある。

・等尺年表による表現活動は、児童が追究している5つの視点を相互に関連付けて示すことを可能にしている。また、年表に表しているため、それぞれの視点の時代による違いや変化などを比較して見つめることを可能にしている。このことは、時間認識の育成につながっていることはもちろん、社会的な事象を比較したり、関連付けたりするという「社会的な考え方（方法）」を実現している。さらに、社会認識を形成するプロセスにおける知識を獲得するための方法の教育の姿であると考えられる。

なお、等尺年表を取り入れたことにより、児童が時間の流れや時間の長さを可視化することができ、時間認識がより確かなものとなったと言える。

・田中教諭は学習のまとめごとに「富雄のまちはどのように移り変わっているだろう」と児童に問いかけている。この問いかけにより、児童は学習の節目ごとに自分が理解している「富雄のまち」を振り返り、明らかにしている。この取り組みは学習対象に対する認識の変化を確認させていることで



あり、学習の見通しを明らかにすることにもつながっている。

・過去から現在に至るまでの富雄のまちの移り変わりを理解した児童たちは、自分たちの「ふるさと」である富雄のまちに対する理解と愛着を深めてきている。そして、今日まで移り変わってきた富雄のまちの未来を想像するという学習に取り組んだとき、自分事としてこうなってほしい富雄のまちについて考えていた。

・田中教諭の実践に見られる児童の姿からは、主権者意識の芽生えを感じることができる。そして、「社会的な見方・考え方を働かせる」社会科学習は「社会認識を育てる」社会科学習であり、主権者意識、ひいては公民としての資質・能力の基礎の育成につながっているということを確認させてくれるものであった。

引用・参考文献 (References)

- 1) 長谷川正『社会認識を育てる授業の創造』東洋館出版 (1990)
- 2) 佐島群巳『環境教育』(大森輝夫『社会科指導用語辞典』教育出版 所収) (1986)
- 3) 永井滋郎『21世紀のビジョン』(伊東亮三『社会科教育の21世紀』明治図書 所収) (1985)
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 社会編』日本文教出版 (2017)
- 5) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会『研究主題 (解説)』 (2019)
- 6) 澤井陽介『見方・考え方 社会編』東洋館出版 (2017)
- 7) 山田 均『社会科教育における見方・考え方とは』奈良学園大学紀要第8集 (2018)